

誤った英語を教えたくないか？

島根県立江津工業高校 八幡成人

本誌 No.21 に掲載された井上貞明氏の論文を興味深く読んだ。中でも「現代英語の実態に即した英語指導を」という発言には、英語教師は特に耳を傾ける必要があると考える。

河上道生氏が再三にわたって指摘しておられるように、高校現場においてかなりの数にのぼる誤った英語が生徒に教えられているからである。英語教師である以上、生徒に正しい英語を教える義務がある。責任がある。そしてそのために可能な限りの努力を怠ってはならないことは言うまでもない。英語の雑誌一冊開こうともせず、何十年前に教わった英語を何の疑問もいなく教室で教えられては困るのである。「教師が勉強しないのに生徒が勉強するはずはありません」とは恩師安藤貞雄先生が事ある度に説かれる言葉であるが、現場の教師全員が肝に命じたい名言と思う⁽¹⁾。

この夏休みにある研究会の司会を命ぜられて、かなりの数の研究発表を聞いた。その中で、工業高校の特質を生かして専門科目に出でくる用語（エンジン、トランジスター、ピストン、etc.）を中心にリストアップして綴りと共に覚えさせて生徒の興味づけを計ろうという取り組みが報告された。約200個ばかりの単語リストであったが、その中に「front-glass フロントガラス」という項目を見て、筆者は唖然としてしまった。このように誤った英語を覚えさせられる生徒こそいい迷惑だが、「休み明けにテスト」されるのだからたまたまのものではない。ちょっと調べれば避けられた誤りである。このような極端な場合はおくとしても、教師の不勉強で生徒に誤った、または不自然な英語を押しつけているようなことはないだろうか。

実例を出したのにはわけがある。筆者は以前 be surprised by と書いた生徒に×を与えられる先生に接し、「いや by もあるんですよ。ニュアンスはちょっと違うと思いますが」と申し上げても信じてもらえなかった、という苦い経験を持つ。それではということで実例をお目につけたら、いっぺんに納得された。最近もある小冊子に be surprised by の用例を35例ほどあげておいたからご覧になった方もおられると思うが、実はその倍以上の例が手元には集まっている。「りっぱな事実を集めたものはそれだけでも信用の価値がある」と説かれたのは山本忠雄博士であった。この a place to live の問題については松田裕氏に詳細なインフォーマント調査があるので、そこから裏づけをとることができる⁽²⁾。

英文文の授業をカナダから来ていた女子交換留学生に手伝ってもらったことがあった。生徒が黒板に書いた英文文に対してコメントをもらう形式で進めたのであるが、The door opened of itself. の所で彼女は赤チョークで of を by に直してしまった。かなりできる生徒の集まったクラスであったから、「今あなたは of を by に直されたが、これと同じ文章が教科書の○○ページに載っているから、直す必要はないのではないか？」という意味のことを一生懸命伝えようとしている。それでも彼女は、がんとして「私たちはそうは言わないから」の一点張りであった。生徒は教科書を信じて疑わない。そんな時一人の生徒が「『ユニオン英和』の of oneself の所に (by oneself のほうが普通) と書いてあります」と発言。みんながめいめいの辞典を引き始める。「僕の辞典にはそんなこと書いてない」「あったあった」「どうなったんだ」大騒ぎであった。現実の英語の語法と教科書・辞典の英語のギャップを彼らはこの時初めて意識したのではないか。目を白黒させたながら私の説明を聞いてくれた。by itself のほうが more common のはずだが、まだ現場では of itself が大きな顔をしているように思えてならない。of itself に*までつけ

て重要成句と強調する学習辞典まで登場する始末だから。

- (4) Why would they be after her already? She felt confident she had not been followed. Maybe the wad of paper had fallen out by itself.

—R. Cook, *Coma*

先生方の中には、as if に続く時制は仮定法でなければならぬと頭から信じきっておられる方が少なくない。穴埋め問題として堂々と出題し、were のみを正解とし was は×、ましてや is と書こうものなら何を言われるかわかったものではない。それでも最近では学習辞典にも「(口)では were の代わりに was を用いることが多い」といった注記が入るようになったから事態はそれほどひどくはないが、現在形を続けることに対しては、十分の理解が得られていないようだ。新聞・雑誌・小説の英語をちよっとのぞいただけでも、現在形の実例はぞろぞろ出てくる。

- (5) I do not wish to defend smokers, but they are treated as if they have some loathsome disease while others behave in ways that are far more offensive and get away with it.

—“Ann Landers,” *Asahi Evening News*, July 18, 1983

- (6) “Fergus, you and all your staff are to act as if there is nothing out of ordinary……”

—A. Hailey, *The Moneychangers*

このような例なら100でも200でもお目につけることができる。もちろんこのような事情を承知した上で、学習の便宜上、仮定法を使うように指導するのなら何ら問題はないのだが。

太 田 雄 三 著

『英語と日本人』

1981年10月20日発行

TBSブリタニカ ¥1,300 329ページ

cf. (4) He rose, stretched, went to the water cooler, drank a paper cup full of water, and then went back to the desk.

—Ed McBain, *Catypso*

Woman as she is, she is able. (彼女は女ながらも敏腕だ) といった「譲歩」を示す as の例文が教科書・参考書・英和辞典に見られるが(受験英語でたき込まれたという記憶が筆者にもある), その妥当性を一応疑ってみる必要がある。—foot を平気穴埋め問題として出題し on のみを期待されるようではひどすぎる。「try to... …しようとする, try …ing 実際に…してみる」といった区別があまりにも強調されていることはいいか。be willing to... を単に「喜んで…する」と片づけてしまいがちだが、実際に用例を集めてみられればその問題点に気がつかれるであろう。keep early hours を「早寝早起きする」と英和辞典に書いてあることをそのまま信じてよいのか⁽³⁾。「(英) today [this day] week 来週 [先週] の今日」をそのままに生徒に伝えてはいないか。「旅行する」は take a trip でも make a trip でも同じことであろうか。

英語教師の責任においても、現代英語の実態に即した英語指導のための手問ひまを惜しんではならないと思われる。

〔註〕

- (1) 例えば安藤貞雄『英語教師の文法研究』(大修館, 1983年)を参照されたい。
- (2) 松田裕「英語語法研究 —a place to live—」『外国語・外国文化研究』N (関西学院大学法学部, 1978年)
- (3) 英和辞典にもかなりの誤った情報が入っていることは『高校通信東書英語』に「英和辞典のウソ」を連載中なので、興味のある方は御覧いただきたい。

「コップ一杯の水」を教室で a glass of water と教えるのは当然だけれど、もし生徒が a cup of water と書いてきたらどうするか。機械的に×を与えるのではなく、日常生活において cup が不自然な理由を一言添えてやると生徒は大いに刺激となるであろう。どういう場合に cup が使われるかを承知しておく必要がある。

(7) It is probably true that this man, accepted as the pattern of nobility in his time, refused a cup of water when he lay dying on the battlefield of Zutphen, saying that it should be given to a wounded soldier lying near to him.

—G. C. Thornley, *An Outline of English Literature*

(8) Two patrolmen wandered into the squadroom, went to the files, opened them, looked at Helen Vale where she sat with her legs crossed, and then went to the water cooler where they drank three cups of water each while watching Helen Vale where she sat with her legs crossed.

—Ed McBain, *Ten Plus One*

(9) “Which one of you gentlemen...?” the man asked. Shimoda poured himself a cup of water. “Richard will fly you. I’m still on my lunch hour. Unless you want to wait.”

—R. Bach, *Illusion*

(10) Every hour or so I gave Jasmine [i.e. dog] a cup of water, then went for another swim, but I didn’t talk to anyone again while I was there.

—C. Webb, “Gwen,” *Orphans and Other Children*

多少の例外はあるにしても、今日、我々日本人が最初に学習する外国語が英語であるという事実には、それなりの歴史的な背景があり、英語が今日の世界の共通語になりつつあることを考えれば、かなりの正当性があると言っよいであろう。また、そのような歴史的な背景や正当性をはなれて、純然たる外国語の習得という言語学習の立場からしても、英語が子音中心的な言語であるという発音上の問題を別とすれば、我々日本人が最初に接する外国語として英語はふさわしく、さらに、英語をある程度学んでおくことが、ドイツ語やフランス語などを学ぶ上で有効であることも事実のようである。

しかしながら、一見やさしい英語は、いつまでも難しく、また、せっかく学んだ英語を日常的な生活の場で用いる機会が限られていいる我が国の一般的な状況では、何年も学びながら英語を思うようには使えない、という嘆きが聞かれるのも無理からぬことである。

ここに紹介する『英語と日本人』は、よく言われる日本人の英語コンプレックスに光を当て、「今日の日本人と英語の関係をめぐるさまざまな問い」に説得力のある答えを見つめるためには、「過去の日本人が英語をどのようにに学んできたか、英語とどのようにに関わってきたか」を振り返ってみる必要がある、そうすることによって「その答えが自然に出てくるはずだ」としている。

本書の圧巻は、なんとと言っても第2章「英語名人の時代」であるが、文明開化の波に乗った明治10年代前後の英語ブームの中で、外国人教師による英語での講義を受けることのできた数少ないエリートたち——新渡戸稲造、内村鑑三、岡倉天心など——の英語体験を詳しく調べあげた上、これらの人々がいわ

ば英語を通じて成人した人々であったことを明らかにしている。

このように明治の初期の短い期間に、著者の言う「英語名人」が育ったのは、これらの人の教育がほとんどすべて英語で行われた当然の結果であり、わけでも神田乃武や津田梅子のように、長いアメリカ留学のために母語である日本語がもはや使えなくなった人々が重んじられた当時の風潮をぬきにしては考えられないことである、とされている。

その後、我が国では日清、日露の両戦役を契機にナショナリズムが台頭して、さしもの英語ブームは退潮し、また、高給を食む外国人教師たちが急速に整理され、日本語による高等教育が推進され、英語は英語という教科の中だけで教えられる学科目となり、早くも我が国の大学生などの英語力の低下が憂慮される事態となった。昭和に入ってからは太平洋戦争中、英語が激性語として排斥された時期は言うも思か、戦後の再度の英語ブームにも拘らず、我々日本人の英語力は一方向に伸びていない、とされて、今日に至っている。

このことは本書の著者も示唆するように、我が国がアングロ・サクソン文化の文化的植民地になることを免れた、ということでもあるが、我々は必ずしも英語力の不足を嘆くには及ばないのかもしれない。著者は最終章「これからの英語と日本人」の中で、我々は、いわゆる「英語らしい英語」よりも、日本人としての主体性を生かし、しかも国際語として通用する「日本英語」の可能性を探るべきだ、と主張する。その主張には、とりたてて新しいものはないにせよ、本書が、日本人にとって英語とは何であるのかを考えさせる一助となることは間違いない。

(ハローード I・I 著者)